

## 〈資料紹介〉 館蔵珠洲経筒外容器について

野 末 浩 之

### はじめに

現在、愛知県陶磁資料館所蔵品の中に、出土地不詳ながら珠洲窯産と思われる蓋付経筒外容器が2点存在する。陶製円筒形経筒外容器は、東海の瓷器系窯、とりわけ猿投・渥美窯において数多く生み出されており、平安末期の窯業生産と経塚造営のあり方との関連を考えるための資料となっている。一方、須恵器系窯については壺の経筒外容器転用例が多く、円筒形の専用器の存在は数例知られていたものの、その生産地は特定できなかった。本2例は珠洲窯製品としての特徴をよく示しており、須恵器系中世陶器の中でも最も特殊器種の豊富な珠洲窯の成立時期およびその事情を考えるための重要な資料と思われる。2例のうち今回紹介の例については銘文が刻み込まれておりその内容からも研究がなされている。すでに各所で紹介されているところではあるが、本小稿では改めて紹介するとともに、専用円筒形経筒外容器を多く生産した猿投・渥美窯との比較から、上記課題について若干考えてみたい。なお、銘文については、その判読および内容についての解釈が定まっていないため、ここでは特に触れないこととした。

### 資料の概要

本例は総高41.0cm、身は高33.7cm、口径17.3cm、底径21.3cmを測る。身はやや傾いているが、やや胴張りの筒形をなす。口縁部は印籠造りではあるが、蓋受けの段は明瞭ではなく、内傾気味に伸びた形態となっている。器厚は体部1.8cm前後、底部1.8cm前後ではほぼ均一の厚さである。底面は砂底で、一部には板目痕も残っている。体部外面には5段にわたって、1条当たり約2mm幅と粗く、5条前後で1単位の原体により櫛目波状文が施されるが、その波長および振幅はバラバラで規則性がなく、ナデつけ等により消されている部分も少なくない。そして、櫛目波状文の後に口縁下から4行にわたって銘文が刻まれている。銘文は蓋受けの部分からはじめられ、蓋が被せられると隠れてしまうような状況である。

蓋は高9.7cm、受部径23.5cm、上面径7.3cmを測り、口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を欠く。甲盛り状の蓋の中心部分は、明確な鈕ではないが約3cm程度盛り上がり、上面には静止糸切り痕とともに草木の刻文が施されている。その周囲にはヘラで刻み目が入れている。器厚は最大で4.5cmであるが受部付近は0.8～1cm程度で端部はシャープに面取りを行っている。中心の突起部分以外はヨコナデ調整を施す。

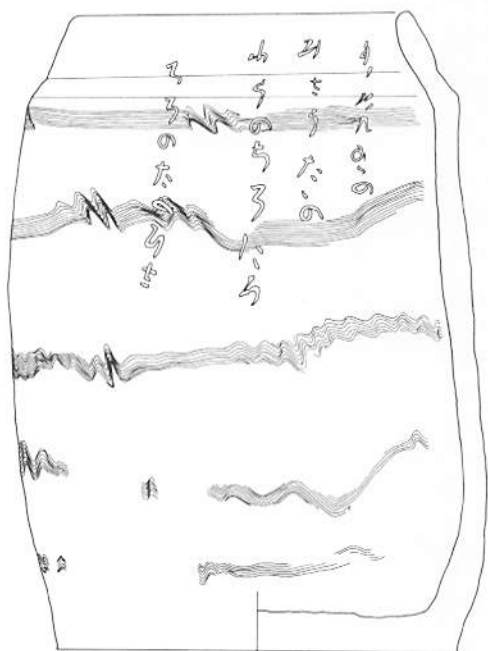
色調は蓋が黒灰色、身が青灰色と異なっており、蓋内面および身口縁端部にゴマ状の自然釉の降灰を受けているため、別々に焼成されたものであり、本来のセット関係にはない可能性が高い。身内面には若干鉄錆の痕跡を残している。

### 東海瓷器系窯製品との比較

今回紹介の例と東海瓷器系窯製品とを比較した場合、鈕の形状に特異性がみられ後者には類例を見出すことができない。珠洲独特の櫛目波状文も後者においては通常は三筋文なのであり、装飾技法からは両者を結びつけることが困難である。しかし、本例のように印籠造りの口縁部をもつ珠洲窯の経筒外容器は、猿投・渥美といった東海の瓷器系窯製品の器形をとり入れたものであるとされている。事実、猿投・渥美窯の経筒外容器は印籠造りや口縁下に突帯をめぐらすものというように、専用の蓋と組み合わせることを前提とした口縁部形態を示すものが、特に三筋文の

編年や紀年銘資料から11世紀末から12世紀第3四半期にかけての時期に集中してみられる。その意味では12世紀中葉を遡り得ないとされる珠洲窯の開窯前から初期にかけてすでに同形態のものは相当数存在し、珠洲窯での生産に際し直接のモデルとなった可能性も否定できない。また、当資料の蓋の形態が、猿投窯牡丹文経筒外容器（当館蔵）の蓋の形態と近似しているとされ、やはり盗器系窯との関連が示唆されている。しかし、牡丹文経筒外容器の場合は、底部が方形の台座となっていること、蓋頂部は抜けていて蓋としての機能をなさないことなどから、おそらくは銅製宝塔の形態を模したものと考えられ、さらに上には蓋が載るものと思われるのに対し、珠洲例は異なっているため、両者の形態の意味には大きな違いが感じられるのである。その違いはある意味で時間的な隔たりを示唆することにもなる。珠洲窯産と思われる資料で、近年元久元年（1204）刻銘で印籠造りの陶片が報告されていることから、この種のものがそれほど時期的に上らないものと思われる。<sup>(注3)</sup>

須恵器系の例で、珠洲窯産の可能性のある新潟県天神山経塚出土の仁安2年（1167）銘の例や飯坂赤川窯産と考えられる福島県天王寺経塚、同米山寺経塚（ともに承安元年＝1171銘）<sup>(注4)</sup>が本例とは異なる低身で素縁の口縁部をもつタイプであることは、例えば、猿投の経筒外容器が比較的定形的な長身・印籠造りが多く、渥美は器形変化に富み低身・素縁のものも見受けられるといった傾向の違いを反映するものであるかも知れない。いずれにしても、珠洲窯での経筒外容器の生産が全くのオリジナルから出発したものとは考えられず、白磁写四耳壺などのように一旦東海盗器系窯で受け入れられた器形がしばらくの時間をおいて珠洲窯においても独自の形で受け入れられていったものと考えたい。



- 注1. 橘崎彰一編『中世陶器シリーズ越前・珠洲』箱根美術館 1986  
銘文読み「わかやまのみさうたか（御庄田が）こくのちそにし（故久の地ぞにし）おちのためひき」  
吉岡康暢編『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館 1989  
銘文読み「わかやまのみそう（御庄）たのこのちゅうにん（直郷の住人）おちのためひき」
- 注2. 注1 吉岡文献より
- 注3. 注2に同じ
- 注4. 金子拓男「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立」『信濃』27-1 1975
- 注5. 『経塚遺宝』奈良国立博物館編 1977

0 10cm

